

# 未来を表す条件節のテンスとアスペクト

— 英語と日本語 —

白 谷 敦 彦

## 0. 序

英語の未来を表す if 節において、次のような例では、未来を表す will の生起が許されない。<sup>1</sup>

- (1) If the boat sinks / *\*will* sink we will get drowned.  
(Declerck 1984: 281)
- (2) If you answer / *\*will* answer that question, you will win a prize.  
(Declerck 1984: 283)
- (3) If he arrives / *\*will* arrive, the band will play the National Anthem.  
(Quirk et al. 1972: 780)

このことから「未来を表す if 節には意志を表す will の生起のみが許され、未来を表す will の生起は許されない」とされてきた。そして、未来を表す will が if 節に現れている次のような例は例外として処理されてきた。

---

<sup>1</sup> 意志を表す will でない will は一般に「未来を表す will」と称されるが、英語に未来時制を認めない立場では、その will は「未来」ではなく、「推量」を表す will であるとされる。本稿の取り扱う事象については「未来」か「推量」かということは直接には問題にはならないので、便宜上この will を「未来」の will と称する。また、3節で取り扱われる日本語の「～そう」という表現も「未来」を表すか「推量」を表すかということについて議論の余地はあるが、上記と同じ理由により、便宜上、「未来」を表す表現であるとする。

- (4) Mr. Pettingill will perform the ceremony, if his health *will* permit him. (Jacobsson 1984: 135)
- (5) If the lava *will* come down as far as this, all these houses must be evacuated at once. (Close 1980: 103)
- (6) I will come if it *will* be of any use to you. (Jespersen 1931: 400)

Shiratani (forthcoming)で私は、未来を表す *will* の生起を例外とする考え方を否定し、未来を表す *if* 節に未来を表す *will* が現れる場合はどのような場合か、現れない場合はどのような場合かを明らかにしている。本稿では英語の *if* 節の分析を行ったのと同じ観点から日本語の条件節をみてみることにする。1節では英語の *if* 節についての考察を簡潔に示し、2節で日本語の分析の前提を示した上で、3節で日本語の条件節について考察することにする。

## 1. 英語の *if* 節

この節では英語の未来を表す *if* 節について Shiratani(forthcoming)で議論していることの概要を示す。

従来説では「*if* 節に単純現在が用いられればその *if* 節は未来を表す」という考え方をしたため *if* 節が未来を表すのに *will* は不要であるという誤った結論に至ったのである。そもそも、「*if* 節に単純現在が用いられればその *if* 節は未来を表す」という観察は正鵠を射ていない。次の例が示すように、*if* 節に状態動詞が用いられた場合、その *if* 節は未来を表さない。現在の状態を表す。

- (7) If you are alone, let us know about it.
- (8) If the package is ready, I'll call for it.
- (9) If the train is behind schedule, I will call you.

状態動詞の単純現在はその自身では現在の状態に言及するので、未来を表すためには、(10) - (12) のように未来を表す副詞類か、(13) - (15) のように未来を表す *will* が必要となる。

- (10) If you are alone *at Christmas*, let us know about it.  
(Leech 1987: 65)
- (11) If the package is ready *at 2.30*, I'll call for it.
- (12) If the train is behind schedule *tomorrow*, I will call you.
- (13) If you *will* be alone, let us know about it.
- (14) If the package *will* be ready, I'll call for it.
- (15) If the train *will* be behind schedule, I will call you.

勿論、未来を表す *will* と未来を表す副詞類の両方があってもよい。

- (16) If you *will* be alone *at Christmas*, Let us know about it.  
(Leech 1987: 65)
- (17) If the package *will* be ready *at 2.30*, I'll call for it.
- (18) If the train *will* be behind schedule *tomorrow*, I will call you.

単純現在と副詞類とで未来を表す (10) - (12) と、*will* と副詞類とで未来を表す (16) - (18) との違いは、前者は副詞類の表す時点から状態動詞の表す状態を見ているのに対し、後者は発話時点からそれを見ている。

(10) と (16) とを比較すると、前者は今日があたかもクリスマスであるかのような見方をしており、後者は発話の時点から未来の時間としてクリスマスを見ている。つまり、前者は「クリスマスの日にひとりぼっちであることに気づいたなら（気づいた時点で、つまり、クリスマスの日に）連絡してください。」という意味を表すのに対して、後者は「今考えて、クリスマスの日にひとりぼっちであることがありそうなら（今、あるいは、すくなくとも、クリスマスの前の日まで）連絡してください。」という意味を表すのである。(11) と (17) を比べてくると、前者は「2時半の時点で荷造りができているなら、その時点で取りに行きます。」ということを書いており、後者は「今考えて、2時半には荷造りができているということがありそうなら、（今から、あるいは2時半前に）取りに行きます。」ということ表現している。(12)、(18) にも同じことが言え、前者は「明日の時点でその列車が遅れているなら、それが判った時点で電話します。」という意味で、後者は「その列車が明日遅れているということがありそうなら電話します。」という意味である。このような、**will** の有無による **if** 節の意味の違いは、状態動詞の単純現在ではそれ自身だけでは現在に言及することに起因している。**Will** が用いられた場合、**will** が発話時点から見た未来を表すので、発話時点から副詞類の表す未来の時点を見ることになるわけであるが、状態動詞の単純現在は現在の状態を表すため、未来を表す副詞類が伴えば、副詞類の表す時点があたかも現在であるかのように状態を表すのである。

状態動詞と異なり、出来事動詞の単純現在が **if** 節に現れた場合は、出来事動詞はこれから起こることを表すので、動詞だけで未来を表すことができる。従来説の「**if** 節に単純現在が用いられればその **if** 節は未来を表す」という考え方は出来事動詞にあてはまることなのである。次の例は **if** 節に出来事動詞の単純現在が現れた例である。

(19) If the boat sinks we will get drowned.

(Declerck 1984: 281)

(20) If you answer that question, you will win a prize.

(Declerck 1984: 283)

(21) If he arrives, the band will play the National Anthem.

(Quirk et al. 1972: 780)

出来事動詞の単純現在<sup>1</sup>はアスペクト的にこれから起こることを表すので未来を表せるのである。しかし、注意しなければならないのは、if 節に現れた出来事動詞単純現在の表す意味に2つあるということである。次の例文を参照されたい。

(22) If the film amuses them, I'll buy some tickets.

(23) If the messenger returns, I'll leave.

これらの文は2通りの解釈ができる。(22)は、「あの子たちがあの映画を見て、見終わったときにおもしろかったと言ってくれたなら、その時点で、別の子たちにも見せたいから、その(別の)子たちのためにチケットを買おう」という解釈と「あの子たちがあの映画を見て、見終わったときにおもしろかったと言ってくれるのなら、その子たちのためにチケットを買おう」という解釈ができるし、(23)は、「使者がもどってきたら、もどってきた時点で僕は行こう」という解釈と「使者がもどってくるのなら、もう(もどってくる前に)僕は行こう」という解釈ができる。(22)、(23)の前者の解釈では、if 節は出来事が実現した時点でのことについて言っており、後者の解釈では、if 節は出来事が起こることがあり得るかどうかについて言及している。前者の表す意味を「出来事の実現時点」、後者の表

す意味を「出来事の実現可能性」と呼ぶことにする。If 節に現れた出来事動詞単純現在では基本的に2つの意味、「出来事の実現時点」と「出来事の実現可能性」を表すことができるということが出来る。(22)、(23)は聞き手の立場からは2つの解釈ができたが、話者は「出来事の実現時点」か「出来事の実現可能性」のいずれかひとつを意図して発話しているはずである。多くの場合は聞き手の立場からも、発話はいずれかひとつに解釈される。それは主節から判断できる。主節の意味内容から if 節が「出来事の実現時点」を表現するか「出来事の実現可能性」を表現するかがわかるのである。例えば、(19)では、主節で「溺れる」ということが表現されているので、if 節は「船が沈む可能性がある」ということではなくて、「船が沈むということが起こったら、その時点で」ということを意味しているのだと解釈される。船が沈む可能性があるだけでは溺れることはないからである。(20)、(21)にも同じことが言える。(20)では、質問に答えた時点で賞が取れるのであって、答える可能性があるだけでは、賞は取れない。(21)でも、到着したその時点で演奏がなされるのであり、到着の可能性があれば演奏がなされるのであれば、バンドはひっきりなしに演奏をしなければならぬ。(22)、(23)の主節は、このような制限を if 節に課さないため2通りの解釈を許すのである。さて、出来事動詞が *will* と共起した場合どのような意味を表すのであろうか。(22)、(23)の文の if 節に *will* を入れると「出来事の実現時点」という解釈はできなくなる。

(24) If the film *will* amuse them, I'll buy some tickets.

(Wekker 1980: 100)

(25) If the messenger *will* return, I'll leave.

*Will* が「未来性」という意味を与えるのだが、これは「出来事の実現時

点」という意味とは衝突するので、*will* と一緒になると出来事動詞は「出来事の実現時点」という意味は表せなくなるのである。(19) – (21) の *if* 節に *will* を付加すると非文になる。これらの *if* 節に *will* が用いられると、*if* 節は *will* の表す「未来性」のため「出来事の実現時点」を表すことはできなくなるが、主節はその意味内容から *if* 節の出来事の実現を必要とするので、*if* 節と主節の意味が矛盾するため文全体は非文となるのである。

(26) \*If the boat *will* sink we will get drowned.

(Declerck 1984: 281)

(27) \*If you *will* answer that question, you will win a prize.

(Declerck 1984: 283)

(28) \*If he *will* arrive, the band will play the National

Anthem.

(Quirk et al. 1972: 780)

(26) の *if* 節は未来を表す *will* があるため、「出来事の実現時点」という解釈はなされなくなり、「出来事の実現可能性」という解釈しか許されなくなる。「船が沈む可能性があれば」という解釈である。これと主節の「溺れるだろう」ということとはかみあわなくなる。先に述べたように、船が沈む可能性があるだけでは、溺れることはないからである。あとの2つの文に関しても同じことが言える。*Will* の表す「未来性」と出来事動詞の表す「出来事の実現時点」とは相入れないという事実から3つの文の非文性が生じてくるのである。これに対して、*if* 節の出来事動詞が「出来事の実現可能性」を表す場合には *will* を用いることができる。*Will* の表す「未来性」と出来事動詞の表す「出来事の実現可能性」という意味は矛盾しないからである。

- (29) (=4) Mr. Pettingill *will* perform the ceremony, if his health *will* permit him.
- (30) (=5) If the lava *will* come down as far as this, all these houses must be evacuated at once.
- (31) (=6) I will come if it *will* be of any use to you.

これらの文では、主節から、if 節は「出来事の実現可能性」を表すと解釈されるが、それは *will* の表す「未来性」という意味と適合するので、非文にはならない。以上のことから、*will*+出来事動詞は「出来事の実現可能性」を表し、出来事動詞単純現在もその意味を表す場合があることになるが、では、その両者の表す意味は全く同じであるのであろうか。(22)、(23) と (24)、(25) をもう一度比較してみよう（ここでは、比較のため、(22)、(23) は「出来事の実現可能性」を表すものとして解釈する）。以下にもう一度挙げる。

- (22) If the film amuses them, I'll buy some tickets.
- (23) If the messenger returns, I'll leave.
- (24) If the film *will* amuse them, I'll buy some tickets.
- (25) If the messenger *will* return, I'll leave.

(24)、(25) は *will* が「未来性」という意味を付加するため、不確かさが強調される結果となり、(22)、(23) と比較すると、実現の見込みが低い表現となる。従って、(22)、(23) の方が相対的に実現の見込みが高い表現となる。出来事動詞の単純現在も *will*+出来事動詞も「出来事の実現可能性」を意味するが、前者は後者に比べて実現の可能性が高いことを表すのである。(29) - (31) の if 節の動詞も単純現在で表現できるが、そう



すると、will を用いた場合よりも実現可能性の高い表現となる。

以上が英語の未来を表す条件節の分析であるが、ここでまとめておこう。条件節に状態動詞が来る場合、状態を表す語句の単純現在には現在に言及するので、それ自身のみでは未来を表せず、will か未来を表す副詞類が必要である。単純現在と副詞類が用いられると、副詞類の表す未来時が発話時点であるかのように表現され、will と副詞類が用いられると、発話時から副詞類の表す未来時をみる表現となる。条件節に出来事動詞が来る場合、出来事動詞の単純現在にはこれから起こることを表すので、それ自身のみで未来を表すことができる。出来事動詞の単純現在は、未来における「出来事の実現時点」と「出来事の実現可能性」の2通りを表せる。Will+出来事動詞は「出来事の実現可能性」を表す。「出来事の実現可能性」を表す単純現在と will+出来事動詞との違いは、前者は確定度の高いことを表し、後者は、前者と比べると確定度の低いことを表す。

## 2. 日本語分析の前提

この節では、日本語の分析をするにあたって必要となる術語や概念を提示する。

まず、英語の状態動詞と出来事動詞という分類に対応する日本語動詞の分類を示す。動詞の分類を最初におこなったのは金田一（1950）であり、以来それが用いられている。寺村（1984: 124）にその要約が載せられているので、それを以下に再掲する。

### 1) 状態動詞－状態を表す。

～テイルの形にならない。

例：アル、イル（可能の）デキル、

要スル、値スル、など

2) 継続動詞—ある時間内続いて行われる種類の動作、作用を表す。～テイルの形になり、動作の進行中であることを表す。

例：人間の動作を表すもの：読ム、書ク、笑ウ、泣ク、など  
自然現象を表すもの：散ル、降ル、など

3) 瞬間動詞—瞬間に終わってしまう動作、作用を表す。～テイルの形になり、動作作用が終わってその結果が残存していることを表す。

例：死ヌ、(電灯が)点ク／消エル、サワル、トドク、決マル、見ツカル、ハジマル、オワル、到着スル、など

4) 第4種の動詞—時間の観念を含まず、ある状態を帯びることを表す。常に～テイルの形で用いられる。

例：ソビエル、スグレル、オモダツ、ズバヌケル、アリフレル、バカゲル、高イ鼻ヲスル、似ル、など

1) と 4) を状態動詞、2) と 3) を出来事動詞と考えることができよう。また、日本語の場合、条件節に現れるのは動詞のみではない。従って、形容詞、形容動詞、さらに、名詞+「ダ」、「テイル」形も状態を表すものとして取り扱う。

次に、英語の if 節の if にあたる日本語であるが、「ば」「と」「たら」「なら」の4つが考えられる。しかし、「ば」と「と」はその用法に限られる。「と」の典型的な用法は次のようなものである。

(32) 2に2をたすと、4になる。 (吉川 1989: 207)

(33) 春になると、花がさく。 (吉川 1989: 207)

(34) あの角を右に曲がると、駅の前に出る。 (吉川 1989: 207)

(33) と (34) では時間的同时性が表現されている。(32) では「2に2

をたすと、すぐに、「4であるという事実が現れる」と言っているのであるから、時間的同时性も表現されているが、当然帰結する論理であるということから、論理的必然性も表現される。このような点を考慮に入れると、「と」は、時間的、論理的に「こうなればそれに続いてこうなるものだ」というように、前件に対してあまり多くの後件が考えられるような条件は表現しないと認められる。次に、「ば」の用法についてみてみよう。

- (35) この薬を飲めば、なおります。飲まなければ、なおりません。  
 (吉川 1989: 207)
- (36) 雨が降れば、行きません。  
 (吉川 1989: 207)
- (37) 話せばわかる。  
 (吉川 1989: 207)

これらの例からわかるように「ば」も「と」ほど強くはないが、だいたいのにおいて、ある順当な結果が生ずるということを表現すると言える。従って、「ば」と「と」は特殊な条件を表す傾向が強いため、日英語の比較には向かないと思われるので除外することにする。

次に押さえておかなければならないことは、「タ」の取り扱いである。「タ」は一般的には過去あるいは完了（テンスとしてみれば「過去」で、アスペクトとしてみれば「完了」）を表すマーカーであるが、次のように過去や完了を意味しない「タ」の用法がある。

- (38) もし私が鳥だったら、空を自由に飛べるのに。  
 (町田 1989: 87)
- (39) (本を探していて) あった。  
 (町田 1989: 87)
- (40) (富士山が見えるのに初めて気づいて)  
 富士山は以前から見えていたのか。  
 (町田 1989: 87)

(38) は仮定法的条件を表す。(39)、(40) の「タ」は「本がある」ことや「富士山が見えている」ことが過去であったり、完了したということを表す発話ではない。(39)、(40) は次のようにパラフレーズされる。

(39') 本がここにあるという事実 (状態) に今気づいた。

(40') 富士山が以前からずっと見えているという事実 (状態) に今気づいた。

つまり、これらは、ある状態は発話以前からずっと続いているのだが、それを発話時に認識した（「認識」が今なされた、完了した）ということを表示しているのである。従って、(39)、(40) に現れている「タ」は通常の過去や完了を表すものではなく、「認識」を表す「タ」であると考えられる。以上でみた、仮定法的条件を表す「タ」と「認識」を表す「タ」は、時間とは直接関係がないため、本稿では取り扱わないことにする。

以上に述べたことを議論の前提として次の節で日本語の未来を表す条件節をみてゆくことにする。

### 3. 日本語の条件節

1 節で英語の分析をおこなったのと同じ順序で日本語をみてゆこう。まず、条件節に状態を表す語句が来た場合であるが、未来を表す副詞類を伴わない文をみる。

(41) ひとりぼっち (である) なら、連絡してください。

(42) 荷造りができているなら、取りに行きます。

(43) その列車が遅れているなら、電話します。

やはり日本語の場合も、状態述語のみでは現在形は現在の状態を表す。これに未来を表す副詞類が足されれば未来の状態を表すことができるようになる。<sup>2</sup>

<sup>2</sup> 未来の状態を表すのに、次のように「タ」を用いた表現も考えられ得る。

- (a) (クリスマスに) ひとりぼっちだったなら、連絡ください。
- (b) (2時半に／2時半の時点で) 荷造りができていたなら、取りに行きます。
- (c) (明日) その列車が遅れていたなら、電話します。

しかし、これらの「タ」は「認識」の「タ」であると思われる。次の例を参照されたい。

- (d) 花子が美しかったなら、太郎は彼女と結婚する。 (町田 1989: 127)
- (e) 太郎に金があったなら、花子は太郎と結婚する。 (町田 1989: 127)
- (f) 社長が来たなら、書類の準備をする。 (町田 1989: 127)
- (g) 低温核融合を実現させたなら、ノーベル賞がもらえる。 (町田 1989: 127)

(d)、(e)の「タ」と(f)、(g)の「タ」とは性質が異なる。(f)、(g)は出来事を表す動詞が条件節にきているので、「タ」は「出来事の実現時点」を表す。(f)、(g)の条件節は、未来において「社長が来る」、「低温核融合を実現させる」ということが実現した時点で(完了した時点で)、ということを表現する。これに対して、(d)、(e)には状態述語がきている。「花子が美しい」ということや、「太郎に金がある」ということは、主節の内容から見て過去のことではないし、また、状態を表すものであるから、完了するといった性質のものではない。本文2節中の(39)、(40)が(39')、(40')にパラフレーズされたように、(d)、(e)は次のようにパラフレーズされる。

- (d') 花子が美しいことがわかったなら、太郎は彼女と結婚する。
- (e') 太郎に金があるとわかったなら、花子は太郎と結婚する。

これに対して、(f)、(g)はこのようにパラフレーズはできない。従って、(d)、(e)に現れている「タ」は「認識」を表す「タ」であると言えよう。この(d)、(e)の場合と同じように、(a) - (c)の条件節にも状態述語ができており、次のようにパラフレーズされる。

- (a') (クリスマスに) ひとりぼっちであると気づいたなら、連絡ください。
- (b') (2時半に／2時半の時点で) 荷造りができているとわかったなら、取りに行きます。
- (c') (明日) その列車が遅れているとわかったなら、電話します。

従って、(a) - (c)の「タ」は「認識」の「タ」であると言えよう。

- (44) クリスマスにひとりぼっち（である）なら、連絡してください。
- (45) 2時半に／2時半の時点で荷造りができているなら、取りに行きます。
- (46) 明日その列車が遅れているなら、電話します。

これらの例では、英語の「単純現在＋未来を表す副詞類」が if 節にくる場合と同じく、その副詞類の表す時点があたかも発話時であるかのように表現されている。これは日本語の場合も英語と同じく、状態述語の現在形はそれ自身のみでは現在の状態を表現するため、それと副詞類の表す時点が融合するからである。英語にはこの他にも (13) - (15)、(16) - (18) のように未来の状態を表す表現として *will* が用いられるものがあるが、それに相当する日本語は次のようになる。<sup>3</sup>

- (47) (クリスマスに) ひとりぼっちでありそうなら、連絡してください。
- (48) (2時半に／2時半の時点で) 荷造りができていそうなら、取りに行きます。
- (49) (明日) その列車が遅れていそうなら、電話します。

日本語では「～そう」という話を用いることにより、英語で *will* が用いられた場合と同じ、発話時からみた未来の状態を表現することができる。<sup>4</sup> 日本語の状態述語が条件節にくる場合を英語と比較しながらまとめると次

<sup>3</sup> (47) - (49) は多くの場合、出来事動詞を用いて次のように表現される。

- (a) (クリスマスに) ひとりぼっちになりそうなら、連絡ください。
- (b) (2時半に／2時半の時点で) 荷造りができそうなら、取りに行きます。
- (c) (明日) その列車が遅れそうなら、電話します。

<sup>4</sup> 注1参照。

のようになる。英語も日本語も、状態述語の現在形はそれ自身のみでは現在に言及する。現在形のままで未来に言及するようになるには、未来を表す副詞類を用いなければならない。その場合、その副詞類が表す未来の時点があたかも発話時であるかのように表現される。未来の状態を表すのに、未来形を用いる方法もある。未来形が用いられると、発話時から未来の時点を見る表現となる。未来形は英語では *will* であり、日本語では「～そう」という語である。

では、条件節が出来事を表す場合をみてみよう。出来事を表す語の現在形は状態を表す語と異なり、これからの出来事を表すため、英語と同じで、未来を表す。(22)、(23)の英文は2通りの解釈ができることを1節でみたが、日本語をそれにあてはめてみよう。(22)、(23)をもう一度以下に挙げる。(22)の2つの解釈のうち、「出来事の実現時点」を(50)、「出来事の実現可能性」を(51)で挙げ、(23)の2つの解釈のうち、「出来事の実現時点」を(52)、「出来事の実現可能性」を(53)で挙げる。

(22) If the film amuses them, I'll buy some tickets.

(23) If the messenger returns, I'll leave.

(50) あの映画があの子たちを楽しませたら／楽しませたなら、(別の子たちのために) チケットを買おう。

(51) あの映画があの子たちを楽しませる (の) なら、(その子たちのために) チケットを買おう。

(52) 使者がもどってきたら／もどってきたなら、僕は行こう。

(53) 使者がもどってくる (の) なら、僕は行こう。

このことから、「出来事の実現時点」を表す日本語としては「たら／たなら (タ+なら)」が相当し、「出来事の実現可能性」を表す日本語としては

「るなら (ル+なら)」が対応すると言えよう。1節の英文の (19) - (21) の従属節は主節の内容から考えて「出来事の実現時点」を表しているとは判断されるが、やはり (19) - (21) の英語に相当する日本語の従属節も、次に示すように「たら/たなら」で表現される。

- (54) 船が沈んだら/たなら、我々は溺れてしまうだろう。
- (55) その質問に答えたら/たなら、賞がもらえる。
- (56) そのお方が到着されたら/たなら、国家が演奏される。

さて、次に問題になるのは、英語の場合、if 節が「出来事の実現時点」を表す場合には will が生じ得ず、「出来事の実現可能性」を表す場合には will が生じ得、will がないとある程度確定した事柄を表し、will があると相対的に確定度の低い事柄を表す、ということが言えたが、日本語はどうかということである。結論を先取りして言うと、日本語にも同じことが言えるのである。「出来事の実現可能性」を表すのに、現在形だと確定的な事柄を表してしまう。未来形の「～そう」という語を用いると相対的に確定度の低い表現となる。(57) - (59) と (60) - (62) を比較しよう。

- (57) 体がもつ (の) なら、Pettingill 氏は式を司るだろう。
- (58) 熔岩がここまでやって来る (の) なら、すぐに避難しなくては。
- (59) それでなんとかなる (の) なら、行こう。
- (60) 体がもちそうなら、Pettingill 氏は式を司るだろう。
- (61) 熔岩がここまでやって来そうなら、すぐに避難しなくては。
- (62) それでなんとかなりそうなら、行こう。



(57) では、体がもつということが確かなものなら、という内容の発話になっているし、(58) でも、熔岩が来ることがある程度の確からしさをもって言えるのならということの意味している。また、(59) でも、自分が行くことで状況が好転するということが確かなのなら、といった、ある種、非難めいた発話になっている。これらに対して (60) - (62) のように、「～そう」という語を入れると、確定さはなくなる。また、この「～そう」という表現は「出来事の実現時点」を表す「たなら」とは共起しない。以上のことから、出来事を表す語句を含む条件節について、英語の *will* は日本語の「～そう」という語に相当することがわかる。

以上の観察から、従属節に出来事を表す語句が来る場合、英語と日本語について次のようにまとめることができよう。従属節に出来事を表す語句が来る場合、その現在形は英語は未来を表し、その未来の出来事の提示の仕方に2通りがある。「出来事の実現時点」と「出来事の実現可能性」の2通りである。前者には日本語では「たら・たなら」が、後者には「るなら」が対応する。未来形は「出来事の実現可能性」を表すが、現在形の表す「出来事の実現可能性」と比べると現在形の方が確定度が高い表現となる。未来形は英語では *will* であり、日本語では「～そう」である。

#### 4. 結 論

これまでの考察から次のように結論づけられよう。

##### A. 条件節に状態を表す語句が来る場合

- ①状態を表す語句の現在形は現在に言及するので、それ自身のみでは未来を表せず、未来を表す副詞類が必要である。その場合、副詞類の表す未来時が発話時点であるかのように表現される。(英語・日本語共通)
- ②未来形を用いることで未来における状態を表すことができる。その場合、発話時点から未来をみる表現となる。(英語・日本語共通) 未来形は英語

では will、日本語では「～そう」という表現である。

#### B. 条件節に出来事を表す語句が来る場合

①出来事を表す語句は英語・日本語ともに現在形でこれから起こることを表すので、それ自身で未来を表すことができる。英語では出来事動詞の単純現在形は、未来における「出来事の実現時点」と「出来事の実現可能性」の2通りを表す。日本語は「出来事の実現時点」を「たら／たなら」で表現し、「出来事の実現可能性」を「るなら」で表現する。

②「出来事の実現可能性」は英語・日本語ともに未来形を用いても表されるが、現在形で表された場合は、確定度の高いことを表し、未来形で表された場合は、現在形の場合と比べると確定度の低いことを表す。その未来形は英語では will であり、日本語では「～そう」という表現である。

以上のことから、英語と日本語の未来形を表す条件節の対応関係が明らかになったと思われる。もう一度実例を出してその対応関係を提示しておこう。

#### A. 条件節が未来の状態を表す場合

英 語 : If the package is ready at 2.30, I'll call for it.

日本語 : 2時半に／2時半の時点で荷造りができているらなら、取りに行きます。

英 語 : If the package will be ready at 2.30, I'll call for it.

日本語 : 2時半に／2時半の時点で荷造りができていそうなら、取りに行きます。

#### B-1. 条件節が未来の出来事の実現時点を表す場合

英 語 : If the film amuses them, I'll buy some tickets.

日本語 : あの映画があの子どもたちを楽しませたら／楽しませたなら、(別の子どもたちのために) チケットを買おう。

B-2. 条件節が、実現の見込みの高い、未来の出来事の実現可能性を表す場合

英語: If the film amuses them, I'll buy some tickets.

日本語: あの映画があの子どもたちを楽しませる (の) なら、(その子どもたちのために) チケットを買おう。

B-3. 条件節が、比較的実現の見込みの低い、未来の出来事の実現可能性を表す場合

英語: If the film will amuse them, I'll buy some tickets.

日本語: あの映画があの子どもたちを楽しませそうなら、(その子どもたちのために) チケットを買おう。

### 欧文参考文献

- Allen, R. L. 1966. *The Verb System of Present-Day American English*. The Hague: Mouton.
- Close, R. A. 1975. *A Reference Grammar for Students of English*. London: Longman.
- . 1980. "Will in If-Clauses." *Studies in English Linguistics for Randolph Quirk*. Ed. S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. London: Longman. 100-09.
- Comrie, B. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1982. "Future Time Reference in Conditional Protasis." *Australian Journal of Linguistics* 2: 143-52.
- . 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Declerck, R. 1984. "'Pure Future' Will in If-Clauses." *Lingua* 63: 279-312.
- . 1991. *Tense in English*. London and New York: Routledge.
- Eckersley, C. E. and J. M. Eckersley. 1960. *A Comprehensive English Grammar for Foreign Students*. London: Longmans, Green.

- Glendinning-Johnson, J. C. 1975. "Syntax and Semantics of *If*-Clause Constructions." Ph. D. Dissertation. Univ. of Pennsylvania. (Available from University Microfilms International.)
- Haegeman, L. 1983. *The Semantics of Will in Present-Day British English: A Unified Account*. Turnhout: Brepols.
- . 1984. "Pragmatic Conditionals in English." *Folia Linguistica* 18: 485–501.
- . and H. Wekker. 1984. "The Syntax and Interpretation of Futurate Conditionals in English." *Journal of Linguistics* 20: 45–55.
- Haiman, J. 1974, "Concessive, Conditionals, and Verbs of Volition." *Foundation of Language* 11: 341–59.
- Jacobsson, B. 1984. "Notes on Tense and Modality in Conditional *If*-Clauses." *Studia Linguistica* 38: 129–47.
- Jespersen, O. 1931. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part 4: *Syntax*. London: Allen and Unwin.
- Jenkins, L. 1972. "Will-Deletion." *CLS* 8: 173–82.
- Leech, G. 1971, 1987<sup>2</sup>. *Meaning and the English Verb*. 2nd ed. London: Longman.
- Nieuwint, P. 1986. "Present and Future in Conditional Protases." *Linguistics* 24: 371–92.
- Palmer, F. R. 1974. *The English Verb*. London: Longman.
- . 1979. *Modality and the English Modals*. London: Longman.
- . 1983. "Future Time Reference in the Conditional Protasis: A Comment on Comrie." *Australian Journal of Linguistics* 3: 241–43.
- Poutsma, H. 1926. *A Grammar of Late Modern English*. Part II: *The Parts of Speech*. Groningen: Noordhoff.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- . 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Rigter, H. J. 1982. *Five Studies on Tense in English*. Leiden: Faculty of Letters.

- Rutherford, W. E. 1970. "Some Observations Concerning Subordinate Clauses in English." *Language* 46: 97-115.
- Shiratani, A. forthcoming. "Three Wills in Futurite *If*-Clauses."
- Smith, C. S. 1978. "The Syntax and Interpretation of Temporal Expression in English." *Linguistics and Philosophy* 2: 43-100.
- Traugott, E. et al. eds. 1986. *On Conditionals*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tregidgo, P. S. 1974. "English Tense Usage: A Bull's Eye View." *English Language Teaching* 28: 97-107.
- Wekker, H. C. 1976. *The Expression of Future Time in Contemporary British English*. Amsterdam: North-Holland.
- . 1980. "Temporal Subordination in English." *Linguistics in the Netherlands 1977-1979*. Ed. W. Zonneveld and F. Weerman. Dordrecht: Foris. 96-103.

## 邦文参考文献

- 安藤貞雄. 1986. 『英語の論理・日本語の論理』大修館書店.
- 言語学研究会・構文論グループ. 1985-86. 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文 (一) (二) (三) (四)」81: 19-31, 82: 26-43, 83: 2-37, 84: 49-68.
- 蓮沼昭子. 1985. 「「なら」と「すれば」」『日本語教育』56: 65-78.
- 細江逸記. 1932. 『動詞時制の研究』泰文堂.
- 井上和子. 1984. 『変形文法と日本語 (上・下)』大修館書店.
- \_\_\_\_\_編 1989. 『日本文法小事典』大修館書店.
- 金田一春彦. 1950. 「国語動詞の一分類」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房. 1976.
- 工藤真由美. 1987. 「現代日本語のアスペクトについて」『教育国語』91: 2-21.
- 国広哲弥. 1967. 『構造的意味論』三省堂.
- \_\_\_\_\_. 1982. 「テンス・アスペクト 日本語・英語」講座日本語学第11巻. 明治書院. 2-18.
- 久野 暉. 1973. 『日本文法研究』大修館書店.
- 草薙 裕. 1983. 「テンス・アスペクトの文法と意味」『文法と意味 I』朝倉書店. 166-208.

- 町田 健. 1989. 『日本語の時制とアスペクト』アルク.
- 三原健一. 1991. 「「視点の原理」と従属節時制」『日本語学』11: 64-77.
- 三上 章. 1953. 『現代語法序説』刀江書院.
- 宮島達雄. 1964. 「バとトとタラ」『講座現代語6』明治書院. 320-24.
- 水谷信子. 1985. 『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版.
- 森田良行・松木正恵. 1989. 『日本語表現文型』アルク.
- 森山卓郎. 1986. 「日本語アスペクトの時定項分析」宮地 裕編『論集日本語研究(二) 現代編』明治書院. 78-116.
- 中右 実. 1980. 「テンス, アスペクトの比較」国広哲弥編『日英比較講座2 文法』大修館書店. 101-55.
- 仁田義雄. 1987. 「条件づけとその周辺」『日本語学』6: 13-27.
- 奥田靖雄. 1978. 「アスペクトの研究をめぐる一一金田一的段階」松本泰丈編『日本語研究の方法』むぎ書房. 203-20.
- \_\_\_\_\_. 1986. 「条件づけを表すつきそい・あわせ文」『教育国語』87: 2-19.
- 佐川誠義. 1972. 「日本語のテンスについて」『言語研究』61: 40-56.
- 坂原 茂. 1985. 『日常言語の推論』東大出版会.
- 坂倉篤義. 1958. 「条件表現の変遷」『国語学』33: 105-15.
- 佐久間鼎. 1983. 『現代日本語の表現と語法』くろしお出版.
- 鈴木英夫. 1970. 「過去と完了-「-た」と「-てしまう」を中心として-」『文法』3.2: 61-69.
- 鈴木重幸. 1979. 「現代日本語の動詞のテンス-終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定の場合-」言語学研究会編『言語の研究』むぎ書房. 5-59.
- 高橋太郎. 1983. 「動詞の条件形の後置詞化」『副用語の研究』明治書院. 293-316.
- \_\_\_\_\_. 1986. 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版.
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 豊田豊子. 1985. 「と、ば、たら、なら」の調査とその結果」『日本語教育』56: 51-64.
- 山口暁二. 1969. 「現代語の仮定条件法-「ば」「と」「たら」「なら」について-」『月刊文法』2.2: 148-56.
- 吉川武時. 1989. 『日本語文法入門』アルク.